

平戸藩領域における益富又左衛門組の成長過程

―安永九年鯨組運上史料一瞥―

末 田 智 樹*

一、はじめに

本稿では、安永九（一七八〇）年前後の平戸藩領域で展開した鯨組の運上史料を考察することで、西海地方における鯨組と藩との運上関係を明らかにすることを目的とする。

西海地方において鯨組は、近世初期の突組の成立から中期の網組への転換をへて、鯨の捕獲量を増大させることに成功した。それにより西海捕鯨業は、近世後期にかけて著しく発展をみせた江戸時代最大級の漁業となった^①。捕獲された鯨からは、採取した鯨油を主とした一大商品群が生み出された。それらの鯨商品は、西海地方の有数な特産物として、大坂や下関などの中央・地方市場を始め、近隣の福岡・熊本藩などの大藩で販売された^②。

鯨組が、西海地方において活動した中心的な捕鯨漁場を有して

いた藩が、平戸藩であった^③。平戸藩領域の島々では、近世初期にオランダ貿易に携わった特権商人を中核とした平戸町人が捕鯨業活動を開始した。平戸藩は、オランダ貿易終了後に自らの藩の財政のみならず、その周辺の中小諸藩の財政を補完する鯨組からの運上による捕鯨業形態を誕生させた^④。

西海地方の鯨組には盛衰による変遷がみられたが、藩を越えた技術伝播による西海捕鯨業地域独特の鯨組の連続性があつた^⑤。近世初期の平戸町人による鯨組活動を受けて、宝暦期（一七五〇―一七六三）から安永・天明期（一七七二―一七八八）にかけて、平戸藩には二つの巨大鯨組が存在した。それが、壱岐の土肥組と本稿で取りあげる生月島の益富組であった。この時期の両組は、平戸藩領域の捕鯨漁場を浦請で占有していた^⑥。

生月島御崎浦を本拠地として活動した鯨組主の益富又左衛門家

には、第一級の一次史料が豊富に残されている。それゆえに西海地方の鯨組のなかで、個別研究が最もなされてきた鯨組である。しかしながら近年では、漁業史分野であることや、近世期の経済史・経営史研究への関心の希薄さ、あるいは長崎の島々といった辺境地を対象としていることで、断片的な研究しかみられなくなつた。益富組は、近世後期の全国における長者番付の上位に連ねた巨大鯨組であつたが、その捕鯨業経営の実態の解明に未だ迫っていると言ひ難い。⁷⁾

本稿では、西海地方の鯨組において管見の限り、研究がみられない安永末期の二つの史料を取り扱う。⁸⁾これらは、『益富家文書年代順目録』の二頁に記載されている史料である。⁹⁾

筆者は、神奈川大学の国際常民文化機構内の共同研究として、宝暦末期と安永初期の益富組における三つの運上史料を、神奈川大学日本常民文化研究所蔵の『漁業制度資料 筆写稿本』所収の益富家資料の翻刻を兼ねて紹介した。¹⁰⁾ところが、三つの史料の分析のみでは、かえって、この時期の益富組の成長過程について不分明の点が噴出した。

したがって膨大な益富家の史料群については、丁寧に紐解いていく作業を積み重ねていくほかないと考える。¹¹⁾また、筆写稿本所収の運上史料の分析を進めてきたが、それだけでは益富組経営の成長段階について解き明かすことはできない。筆写稿本以外の益富家文書の分析を同時に進めることが肝要である。

益富組の運上史料の分析に関しては、松下志朗の極めて優れた

研究がある。¹²⁾本稿を含めて筆者による運上史料の一連の分析は、松下の研究を意識した継続的研究とともに、さらなる深化を求めた研究でもある。松下が長期にわたる運上史料に全体的な定量分析を施したのに対し、本稿では運上史料の時期を限定して定性的に探る方法をとる。安永九（二七八〇）年前後の定性分析では、益富組と平戸藩との運上関係からみえる平戸藩領域における益富又左衛門組の成長過程の解明を試みる。¹³⁾

二、安永八・九年の益富組運上史料の分析

（表紙）

「安永九

亥冬 勝元

子春迄 生属御崎 鯨組先納指引帳

子 八月 御勝手方

益富又左衛門殿 〃

- 一 銀三拾貫目 亥冬勝本浦受銀
- 一 銀六拾貫目 同秋米先納
- 一 銀五拾貫目 魚運上先納
- 一 銀百貫目 油先納
- 一 銀拾五貫目 同所春浦先納

×銀貳百五拾五貫目

一 銀三拾貫目 御崎組米先納

一 銀三拾貫目 魚運上先納

一 銀貳拾五貫目 同所油先納

×銀八拾五貫目

二口

合銀三百四拾貫目

一 銀八拾貫三百五拾目

但、亥冬勝本組^{ニ而}取揚候鯨数四拾三本之内、勢美本魚貳拾九本、運上銀六拾五貫貳百五拾目、同親離^レ子八本、運上銀九貫三百目、同水魚壹本、運上銀八百目、同見分物壹本、運上銀壹貫六百目、座頭見分物壹本、運上銀壹貫目、同親離^レ子三本、運上銀貳貫四百目、右魚数当^ル運上銀

一 銀六貫貳百九拾五匁

但、右同所春浦^{ニ而}取揚候鯨数九本之内、勢美本魚三本、運上銀四貫五百目、座頭見分物壹本、運上銀四百目、兎鯨白子持式最合、運上銀壹貫三百九拾五匁、右魚数当^ル運上銀

一 銀百七拾五貫八百七拾貳匁

但、右同所冬・春魚数^{ニ当ル}運上油三千九百貳拾貳挺之内、百八挺御台所御用、同百五拾挺御家中用、引残三千六百六拾四挺当^ル銀、壹挺四拾八匁替^ニ
一 銀貳拾貳貫七百六拾五匁五分

但、生属御崎組^{ニ而}取揚候鯨数四拾壹本之内、八本勢美本

魚運上銀拾貳貫目、同親離^レ子壹本、運上銀百五拾目五分、

同見分物壹本、運上銀百貳拾九匁、座頭本魚九本、運上銀

六貫七百五拾目、同見分物九本、運上銀壹貫七拾五匁、同

親離^レ子五本、運上銀五百拾六匁、同白子壹本、運上なし、

兎鯨式最合、運上銀壹貫五百目、同壹最合突組^{ニ而}運上銀

六百四拾五匁、右魚数当^ル運上銀

一 銀三拾壹貫貳百目

但、右同所魚数当定油六百五拾挺、代壹挺四拾八匁替

合銀六百五拾六貫四百八拾貳匁五分[㊤]

内五拾貫目 前^ニ記勝元組魚運上銀先納引

同百貫目 右同油先納引

同拾五貫目 右同所春浦先納引

同三拾貫目 御崎組魚運上先納引

同貳拾五貫目 右同所油先納引

残四百三拾六貫四百八拾貳匁五分[㊤] 納り前

内納り方

一 銀百八拾貫目

但、但戌秋前繰両組へ三百貫目被仰付候、六歩^ニ当銀
内貳拾貫目 戌八月十九日納り
同四拾貫目 戌九月廿六日下関為替^{ニ而}納り

同拾貫目 戌十月三日木田善吉納

同拾貫目 戌十月七日右同人納

同九拾貫目 戌十月五日長崎才覚納り

同拾貫目 戌十一月七日木田善吉納

一 銀百貳拾貫目

亥春相定大坂仕出^シ式百貫目割六歩^ニ当^ル銀

内拾貫目 亥二月十八日木田善吉^と納

同百拾貫目 下関・瀬戸内才覚大坂納^メ

✕

一 銀四拾貫目

亥春組指引之上渡り前、銀百貫九百八拾三匁八分五厘之内、

直引合

一 銀壹貫百四拾四匁八分

但、御台所御用ていら三千貳百六拾六斤、代九百七拾九匁八

分、赤身八百六拾九斤、代百三拾目三分五りん、蕪骨貳貫

四百目、代九分、不りく六貫七百五拾目、代三拾三匁七分五

厘^ニ直納^メ

一 銀三貫五百目

但、亥年御台所御用鯨油納り不足七拾挺、去春組用指引後相

納候^ニ付、代銀渡り前直引合^メ

✕銀三百四拾四貫六百四拾四匁八分 納り高[㊤]

残九拾壹貫八百三拾七匁七分[㊤]

納り前

一 銀八百五拾目

但、勝元組・御崎組米先納九拾貫目^ニ当^ル米五千貳百九拾四

俵三斗五合三勺、壹俵拾七匁替^ニ渡前之處、五千三百四拾

四俵三斗五合三勺相渡候付、五拾俵渡越成分納り前

合銀九拾貳貫六百八拾七匁七分[㊤]

納り前

✕

此銀亥暮江戸・大坂登為替代り銀之内、渡り引合納り差引^ニ

相済

右者去亥冬^と当子春迄、勝元・生月御崎組米先納并御運上魚油先

納差引如斯御座候以上

子

八月

浦瀬辰 平

山口磯右衛門

益富又左衛門殿

前書之通承届候以上

日高奎之 平[㊤]

橋本勇 平[㊤]

吉木形右衛門[㊤]

都野川軍兵衛

次に列举したことが本史料から判明する。

第一。まず史料から安永八（一七七九）年の壱岐勝本冬浦の「浦受銀」は、三十貫目であったことが判明する。次いで米、魚運上、油の先納銀は、勝本組の六十貫目、五十貫目、百貫目と、御崎組の三十貫目、三十貫目、二十五貫目と、それぞれに記されている。

また、安永九年の勝本春浦の先納銀は、十五貫目であった。そして合銀は、二百五十五貫目と八十五貫目を合わせた「二口」で三百四十貫目という膨大な先納銀であったことがわかる。勝本組と御崎組の先納銀については、その額の大幅な違いから壱岐における捕鯨業の捕獲量の大きさが判明する。また、御崎組には浦受銀はなく、勝本組には安永初期の瀬戸組と同額の浦受銀が定まっていたことがわかる。⁽¹⁴⁾

第二。第一の定額納に続いて、「取揚」の捕獲数による運上銀および運上油が載せられている。⁽¹⁵⁾ここから勝本組の冬浦と春浦の捕獲数と捕獲された鯨の種類が知れる。また、鯨によつては一頭あたりの運上額が読み取れる。例えば、勝本組の冬浦で捕獲された「勢美本魚」は一頭あたり二貫二百五十目で、春浦では一貫五百目であった。⁽¹⁶⁾御崎組の「勢美本魚」について一頭あたりを計算してみると、一貫五百目であった。このことから、この運上は壱岐春浦で捕獲された勢美鯨の運上と同額であったことがわかる。⁽¹⁷⁾御崎組の座頭鯨は、一頭あたり七百五十目であった。運上額からみると、これも壱岐春浦での捕獲鯨の運上と同額であった。⁽¹⁸⁾児鯨は「式最合」で一貫五百目となっていることから、一最合では七百五十目となる。⁽¹⁹⁾このように運上額の違いから勢美鯨、座頭

鯨、児鯨の順でランクが決まっていたことがわかる。⁽²⁰⁾なお、一挺あたりの油と銀との交換比率は「壱挺四十八匁替」であった。安永初期の比率とは異なることから市場における価格変動による相場が存在していた。⁽²¹⁾

第三。全体の捕獲数については、冬浦と比べて春浦の捕獲数の少なさがわかる。勝本組は冬浦の四十三頭と春浦の九頭、御崎組は冬・春浦を合わせて四十一頭であった。捕獲数の合計は、九十三頭で安永七（一七七八）年までと比較しても大漁であった。⁽²²⁾勝本組の冬浦と御崎組の冬・春浦の捕獲数は、ほぼ同じ四十頭であった。それにもかかわらず、運上額の大幅な相違は勢美鯨の捕獲数と一頭あたりの単価の違いであった。勢美鯨の他に、座頭鯨と児鯨がみられたが、勢美鯨を中心に捕獲がなされていたことがわかる。⁽²³⁾また、御崎組に突組が存在していたことも判明する。⁽²⁴⁾

第四。この時期の総運上額は、先納銀の定額と捕獲数による運上額を合わせて六百五十六貫四百八十二匁五分であった。そのうち益富組から「先納引」されたのは、魚と油の運上など合わせて二百二十貫目であった。残りの四百三十六貫四百八十二匁五分は、益富組から「納り前」であった。最終的には、三百四十四貫六百四十四匁八分が「納り高」となっていた。残りの九十一貫八百三十七匁七分は「納り前」であった。安永末期に多額の先納銀が納められていたことは判明する。⁽²⁵⁾

第五。先納に関しては、「下関為替」や「木田善吉」、「長崎才覚」、「下関・瀬戸内才覚」から納められている。⁽²⁶⁾益富組と取引が

あった市場や各地の商人からであった。この点は、前稿の安永初期の史料と比較できる⁽²⁷⁾。木田については、前稿で出てきた木田善八と同じ屋号である⁽²⁸⁾。下関為替や長崎・下関・瀬戸内の商人の存在がわかり、前稿同様に「大坂」の記述がみえる。運上史料からも、大坂、下関、長崎、瀬戸内などの中央・地方市場の都市商人といった鯨油の取引販売先との関係が浮かびあがってくる⁽²⁹⁾。

第六。最後の部分については、最初に記された勝本・御崎両組の米先納銀の九十貫目が渡り前であったことが知れる。しかし、安永八年の暮には、江戸と大坂の為替で「差引」がなされ、完済されたことが記されている。本史料から米、魚、油の三つの運上は、すべて貨幣で先納されていたことが読み取れる。これは平戸藩領が島々で構成され、浦方が重視された平戸藩ならではの史料であるからと言えよう⁽³⁰⁾。

三、安永九・天明元年の益富組運上史料の分析

(表紙)

「 天明元年

子冬^ろ 瀬戸

丑春迄 御崎 鯨組御運上銀油指引帳

六月 御勝手方

益富又左衛門殿

」

- 一 銀三十拾貫目 子冬瀬戸浦請銀
- 一 銀六十拾貫目 同秋米先納
- 一 銀六十拾貫目 魚運上先納
- 一 銀百五十拾貫目 油先納
- × 銀三百貫目
- 一 銀三十拾貫目 生属御崎組米先納
- 一 銀三十拾貫目 魚運上先納
- 一 銀五十拾貫目 油先納
- × 銀八拾五貫目

二口

合銀三百八拾五貫目

一 銀四十拾貫目百九拾三匁

- 但、子冬瀬戸組^{ニ而}取揚候鯨数三拾三本之内、勢美本魚七本、運上銀拾五貫七百五拾目、同親離^レ子拾本、運上銀拾壹貫五百五拾目、同見分物壹本、運上銀壹貫九百目、座頭本魚貳本、運上銀貳貫貳百五拾目、同親離^レ子四本、運上銀壹貫八百目、同見分物三本、運上銀貳貫三百目、同子持壹催合、運上銀貳貫貳百五拾目、同挟白子持壹催合、貳貫貳百五拾目、長須見分物壹本、運上銀五百目、外^ニたかまつ壹本、運上銀四拾三匁、右魚数当^ル運上銀銀貳貫四百五拾目

但、右同所春浦^{ニ而}取揚候鯨数四本之内、座頭本魚壹本、運上銀七百五拾目、同子持壹催合、運上銀壹貫五百目、同

一 親離^レ子^レ壹本、運上銀貳百目、右魚数当^ル運上銀
銀四拾三貫四百六拾目

但、右同所冬・春魚数^ニ当^ル運上油千三百拾八挺之内、
百八挺御台所御用、同百五拾挺御家中用、引殘千六拾挺、
代壹挺四拾壹匁替

一 銀拾九貫拾三匁

但、生属御崎組^ニ取揚候鯨数貳拾四本之内、勢美本魚六本、
運上銀九貫目、同親離子三本、運上銀四百三拾目、同見分
物壹本、運上銀貳百拾五匁、同子持貳催合、運上銀六貫目、
座頭本魚壹本、運上銀七百五拾目、同親離子貳本、運上銀
貳百拾五匁、同見分物五本、運上銀九百三匁、同子持壹催
合、運上銀壹貫五百目、右魚数当^ル運上銀

一 銀貳拾六貫六百五拾目

但、右同所魚数当^ル定油六百五拾挺、代壹挺四拾壹匁替

合銀五百拾六貫八百六拾六匁[㊦]

内六拾貫目 前記瀬戸組魚運上銀先納引

同百五拾貫目 右同所油先納引

同三拾貫目 御崎組魚運上先納引

同貳拾五貫目 右同所油先納引

殘貳百五拾壹貫八百六拾六匁 納り前[㊦]

内納方

一 銀百貳拾貫目 但、亥盆前前繰両組へ貳百貫目被仰付候、

六歩^ニ当^ル銀

内三拾貫目

亥六月廿五日筑前石蔵屋利左衛門方へ為替

証文壹通^ニ納り

同拾貫目

亥七月二日納り直^ニ米調下^シ代銀之内^ニ渡り

同拾貫目

亥八月五日木田善吉納

同拾貫目

亥九月十三日右同人納

同壹貫目

亥十月六日右同人納

同壹貫目

亥十月十一日晝屋三郎治納

同五拾八貫目

子正月十五日下午関^ニ調下^シ米代渡り前ノ内

右直納り

×

一 銀六拾貫九百八拾三匁八分五厘

但、戌冬^ニ亥春迄、組方指引之上渡り前、亥冬^ニ子春迄組方
先納銀^ニ納り、直引合殘^ル分納り^ニ引合

銀百貳拾貫目

一 但、子春相定大坂仕出貳百貫目割六歩^ニ当^ル銀大坂直納

一 銀八拾四貫拾六匁壹分五厘

但、去々亥暮江戸・大坂為替代銀指引殘渡り前直納^ニ引合

銀壹貫百八拾目八分四厘

一 但、御台所御用ていら三千四百三拾三斤、代壹貫貳拾九匁九
分、壹斤三分替、赤身七百七拾五斤、代百拾六匁貳分五厘、
壹斤^ニ付壹分五厘替、蕪骨貳貫五百目、代九分五厘、壹貫

目付、三分七厘五毛替、不りく六貫七百五拾目、代三拾三匁七分五厘、壹貫^ニ付五匁替^ニ直納^リ

銀^④三百八拾六貫百八拾目八分四厘 納り高

内式百五拾壹貫八百六拾六匁 前^ニ記納前引

同式百拾七匁五分

但、米先納瀬戸・御崎組^ニ而九拾貫目^ニ当ル米六千貳百六俵式

斗六升八合八勺、壹俵拾四匁五分替^ニ渡前^ニ之処、六千貳百

式拾壹俵式斗六升八合九勺相渡^ニ付、拾五俵渡越相成分納り

前

残百^④三拾四貫九拾七匁三分四厘 渡り前

✕

右者去子冬^ニ当丑春迄、瀬戸・御崎鯨組運上銀油并先納米指引如
斯御座候以上

丑

六月

浦瀬辰 平

山口磯右衛門

益富又左衛門殿

前書之通承届候以上

日高全之平

橋本勇 平

日高治左衛門^④

吉木形右衛門

右の史料（史料2とする）から判明する点を、前年の史料（史料1とする）との相違点に着目しながら列記していこう。

第一。史料1と同じく壱岐における益富組の運上史料である。

益富組は、土肥組との間で二つの捕鯨漁場であった勝本浦と瀬戸浦を隔年交代で使用していた。この年の益富組は、安永初期の史料と同じく瀬戸浦での捕鯨業であった。^③瀬戸組の魚運上は六十貫目で、油運上は百五十貫目であった。勝本組の魚運上の五十貫目と油運上の百貫目より合計六十貫目ほど高く、史料1とは大きく異なっている。この運上額は、前稿の安永初期の史料における瀬戸組の先納額と一致する。このことから、同じ壱岐冬浦にもかかわらず、魚と油の定額の先納銀の大幅に相違していたことは着目する必要がある。^③

第二。瀬戸組の冬・春浦と御崎組の冬・春浦における捕獲鯨とその捕獲数および運上銀・油の詳細が、史料1と同じく読み取れる。この時期の鯨の種類別による捕獲数は、運上の度合いにかかわっていたことがわかる。したがって、鯨組経営によって、どの鯨を捕獲するかという現場での選別は、非常に重要であった。前年より捕獲数が少ないにもかかわらず、瀬戸・御崎両組における魚・油の定額の先納引分は、二百六十五貫であった。史料2の方が捕獲数に関係なく定額の先納銀は、四十五貫ほど高いことが判明する。^③

第三。捕獲された鯨の種類については、長須鯨の存在が新たにみられる。西海地方の捕獲対象の主な鯨は、本稿の一次史料から

「勢美鯨」「座頭鯨」「長須鯨」「児鯨」の四種であったことが判明する。⁽³⁴⁾史料2からは、史料1で算定した御崎組における春浦の座頭鯨の運上額が七百五十匁だったことがわかる。⁽³⁵⁾また、壹岐冬浦の座頭一頭あたりは、一貫百二十五匁であったことも知れる。⁽³⁶⁾なお、一挺あたりの油と銀との交換比率が、史料2では「壹挺四十一匁替」とされ、安永初期と史料1の比率と異なっていた。⁽³⁷⁾

第四。先納の方法についてである。「納り前」は、二百五十一貫八百六十六匁であった。安永八年から翌九年にかけて支払いが済まされていたことがわかる。筑前博多商人の石蔵屋利左衛門、木田善吉、同族の畳屋三郎治などの名前がみられる。⁽³⁸⁾また、博多、下関や大坂、江戸の為替による支払いであったことが読み取れる。⁽³⁹⁾畳屋三郎治は、同族の畳屋のなかで最高の位置にあった益富組の大別当の一族であった。畳屋三郎治の史料への出現は、安永初期の史料に現れた同じく、最高位の大別当であった畳屋又右衛門と同じ部分であった。益富家と畳屋との間で経営上の取引が同族間で存在していたことは間違いなからう。⁽⁴⁰⁾平戸藩への先納の運上には、同族団による鯨組組織の存在は欠かせなかったと言えよう。

第五。史料1と異なつて「渡り前」が、百三十四貫九拾七匁三分五厘ほど存在した。また、史料1では八月と記載された時期が、史料2では「丑六月」と書かれ、二ヶ月ほどずれていた。この点は、先納額との関係で注意が必要であろう。そして、期限内における莫大な先納銀の納入方法が年によって様々であったことが、史料

1と史料2から判明する。しかし、運上の要求が平戸藩からあったことは、近世中期の幕藩制社会の状況を如実に示す重要史料であろう。

四、おわりに

本稿による結論としては、次の四つに整理しておく。

第一。益富家文書の史料群のなかで、本稿で取りあげた二つの運上史料の存在と性格である。膨大な先納に関する運上を記した内容のみならず、対象とした捕獲鯨や先納銀にかかわった経営上の取引地域や取引相手が汲み取れる。すなわち、益富組の成長過程が知れる貴重な史料であった。この史料には、安永末期の鯨組と藩との関係、鯨組と中央・地方市場の商人との関係が隠されていた。西海地方の平戸藩における巨大鯨組の実態が、鮮やかに現れた史料であった。⁽⁴¹⁾

第二。運上の先納の種類については、定額納と捕獲数に応じた「取揚」運上の二つがあった。それらを合わせた多額の運上が、安永末期に存在していた。魚運上の額から壹岐瀬戸浦・勝本浦と生月島御崎浦の三つの捕鯨漁場にランクがあった。これまで壹岐の二つの浦は同等にみられていた。⁽⁴²⁾しかし、勝本浦より瀬戸浦の方が定額の先納銀が高額だった。この先納銀の相違は、藤本隆士が解明した明和・安永期（一七六四〜一七八〇）における両浦の冬浦の捕獲量を比べてみて、瀬戸浦の捕獲量が高かった点に一因

があるのではないかと考えられる。⁽⁴³⁾

第三。鯨の種類別の捕獲量はその年次の運上額に大きくかわつていたことが、二つの史料からも判明する。従来「一頭捕れば七浦浮ぶ」という文言が、近世捕鯨業の利潤を語るときに頻繁に使用されてきた。⁽⁴⁴⁾しかし、ただ単に鯨を捕獲すればよいわけではなかった。『勇魚取絵詞』には、沖場の一番の目的は勢美鯨を捕獲することであると記されている。しかも、他の鯨の捕獲中であつても勢美鯨を発見したら、その捕獲作業を中止しても勢美鯨の捕獲へ向かうと書かれている。⁽⁴⁵⁾この点が、本史料からより具体的につかみ取れた。筆者は、益富組が鯨捕獲に携わる沖場組織の中心的な職種であつた羽指の力量を、組別に均等に労働配分した点について、「割」と題された史料群から指摘した。「割」以外の運上史料にも、鯨組経営にとつて沖場での捕獲作業の重要性が秘されていた。⁽⁴⁶⁾本稿の史料から鯨を捕獲して鯨商品を生み出し、その販売から多額の運上を編み出す過程がかいま見えた。⁽⁴⁷⁾

第四。前稿と重ね合わせると二層、先納の納入方法が複雑であつたことがわかる。鯨油の販売先からの為替による分割した支払いが主にみられた。松下が指摘したように長期にわたる膨大な運上額であつたために、その支払いに相当の苦労があつた様子が汲み取れる。⁽⁴⁸⁾益富組からの運上は、決して一括して納められていたわけではなかった。西海地方の巨大鯨組Ⅱ海の大商人であつた益富組の成長過程には、江戸、大坂、下関、博多、長崎などの中央・地方市場の商人との為替決済を通じた近世中期の藩際経済におけ

る経営システムがみえた。⁽⁴⁹⁾

以上のように、安永末期の益富組による平戸藩への莫大な運上の背景にあつた鯨組経営の実態の一端が鮮明になった。この実態こそが、益富組が寛政期後半より他領国の捕鯨漁場へ出漁するほどの巨大鯨組へと成長した過程であつた。しかし、巨大鯨組へと成長する時期だっただけに、二つの史料分析だけでは到底、益富組の経営展開の全貌を明らかにすることは不可能である。次に、結論を進展させるための課題として、以下に三つほどあげて締め括りたい。

第一。この時期の益富組経営の成長段階を知るためには、運上史料とそれ以外の史料との比較分析が必要である。それに加えて、西海捕鯨業の実態を探るうえで、従来の経済史・経営史的な定量的分析の他に、一つ一つの史料を丹念に吟味していくことが肝要である。⁽⁵⁰⁾

第二。紀州、長州、土佐などの他の捕鯨業地域との比較分析が不可欠である。その分析から西海地方における捕鯨業の特殊性や、藩領域における捕鯨業の漁場利用問題などが判明するからである。西海地方最大の捕獲量を誇った壱岐の捕鯨漁場の位置づけを行うためには、運上の視点より捕鯨漁場の利用問題の考察が切要となつてきた。⁽⁵¹⁾例えば、高橋美貴、後藤雅知などが押し進めてきた漁場請負制の研究と比較し、漁業社会構造のなかで捕鯨業を運上の視点から捉えていくことが大切である。⁽⁵²⁾従来捕鯨業については、近世日本最大の大規模漁業ということで、漁業史の観点か

らの分析は少なかつた。今後は、漁業史的視点から積極的に取り組むことが肝心である。

第三、本史料にみられたように藩への多額の運上銀が、西海地方の巨大鯨組を中心に展開していた捕鯨業において存在していた。藤本が究明したように、北部九州における問屋商人の運上銀体系や益富組の銀錢勘定の手法と比較し、銀と錢を巧みに活用した取引実態を把握する必要がある。なぜならば、このシステムを利用して益富組は、西海地方随一の巨大鯨組に成長したからである。前稿の史料とあわせて、大坂商人、下関商人、博多商人、長崎商人との繋がりが一層鮮明となつた。益富組と藩や市場、都市商人との関係の浮き彫りにするためには、この史料で出現した人物の解明が基本的な作業である。今後は、各市場の商人との関係性も含めて西海地方における巨大鯨組の活動実態を論究していかねばならない。

以上のように、運上問題は、近世日本経済史・経営史・漁業史の格好の研究材料であり、現代社会に連なるテーマである。引き続き、益富組の運上史料の定性分析から鯨組経営の実態を解明するとともに、平戸藩領域の鯨組からうかがえる西海捕鯨業地域の性格について解き明かすことが眼前の課題となろう。

附記

本稿は、二〇一二・二〇一三年度中部大学特別研究費に基づいて活動した研究成果の一部である。

本稿の作成にあたって、益富家文書および益富組を中心とした近世西海捕鯨業史に関する経済史・経営史研究については、恩師の藤本隆士先生（福岡大学名誉教授）よりご指導を賜った。歴史地理学・民俗学的観点からの分析の重要性については、恩師の田畑久夫先生（昭和女子大学大学院教授）よりご指導を賜った。また、益富家文書の活用方法については、福岡大学研究推進部の藤本俊史先生、後藤正明先生よりご指導を賜った。

近世・近代漁業史的視点からの分析の重要性および神奈川大学日本常民文化研究所蔵『漁業制度資料 筆写稿本』の活用方法については、伊藤康宏先生（島根大学教授）、田島佳也先生（神奈川大学教授）、片岡千賀之先生（長崎大学名誉教授）、小岩信竹先生（東京国際大学教授）をはじめとする先生方から水産史研究会ならびに国際常民文化研究機構の共同研究会を通じて、数多くのご指導を賜った。ここに記して深甚なる謝意を表したい。

注

(1) 末田智樹『藩際捕鯨業の展開』の「序章」の注記に掲げた漁業史・産業史に関する文献を参照。以下、とくに出版社と出版年を具体的に示さないものは引用・参考文献に掲げている。また、頁数を示していない場合は文献全体に関係しているためである。

(2) 藤本隆士「幕末西海捕鯨業の資金構成」、藤本隆士『西海捕鯨業経営と福岡藩』、藤本隆士「鯨油の流通と地方市場の形成」、秀村選三・藤本隆士『西海捕鯨業』一六七頁。

(3) 引用・参考文献の秀村選三、藤本隆士、武野要子、鳥巢京一、末田智樹を中心とした益富組関係の研究文献を参照。

(4) 末田前掲『藩際捕鯨業の展開』、川淵龍「初期平戸町捕鯨組織家の人的考察」、吉村雅美『近世日本の対外関係と地域意識』（清文堂、二〇一二年）などを参照。

(5) 末田前掲『藩際捕鯨業の展開』。

- (6) 秀村選三「近世西海捕鯨業における生月島益富組の創業」、秀村・藤本前掲「西海捕鯨業」。
- (7) 末田前掲「藩際捕鯨業の展開」、末田智樹「西海捕鯨業地域における巨大鯨組の形成過程」、末田智樹「西海捕鯨業地域における益富又左衛門組の拡大過程」。
- (8) 秀村前掲「近世西海捕鯨業における生月島益富組の創業」、秀村・藤本前掲「西海捕鯨業」、末田前掲「西海捕鯨業地域における巨大鯨組の形成過程」。
- (9) 秀村選三・藤本隆士他編『益富家文書年代順目録』二頁の「安永九子八月 亥冬ち子春迄 勝元生属御崎鯨組先納指引帳 御勝手方 益富又左衛門殿」(No.三九八) および「天明元年六月 子冬ち丑春迄 瀬戸御崎鯨組運上銀油指引帳 御勝手方 益富又左衛門殿」(No.三九七)。
- (10) 末田前掲「西海捕鯨業地域における巨大鯨組の形成過程」。
- (11) 末田前掲「西海捕鯨業地域における巨大鯨組の形成過程」、末田前掲「西海捕鯨業地域における益富又左衛門組の拡大過程」。
- (12) 松下志朗「西海捕鯨業における運上銀について」。
- (13) 松下前掲「西海捕鯨業における運上銀について」、末田前掲「西海捕鯨業地域における巨大鯨組の形成過程」に続く研究となる。
- (14) 松下前掲「西海捕鯨業における運上銀について」二五〇三三頁、末田前掲「西海捕鯨業地域における巨大鯨組の形成過程」二四九頁。また、松下の論考による指摘は本稿の全体にかかわるので、これ以降の注では必要最小限に留めた。
- (15) 松下前掲「西海捕鯨業における運上銀について」二五〇三四頁。
- (16) 武野要子「前目勝本鯨組永統鑑」一四四〇一四五頁。
- (17) 武野前掲「前目勝本鯨組永統鑑」一四五頁。
- (18) 武野前掲「前目勝本鯨組永統鑑」一四五頁。
- (19) 武野前掲「前目勝本鯨組永統鑑」一四六頁。
- (20) 「勇魚取絵詞」(宮本常一・原口虎雄・谷川健一編『日本庶民生活史料集成』第十巻、三一書房、一九七〇年)二八七〇二八八・三〇三頁。
- (21) 末田前掲「西海捕鯨業地域における巨大鯨組の形成過程」。
- (22) 秀村・藤本前掲「西海捕鯨業」一六四頁、末田前掲「西海捕鯨業地域における巨大鯨組の形成過程」。
- (23) 前掲「勇魚取絵詞」二八八頁。
- (24) 武野前掲「前目勝本鯨組永統鑑」一四六頁、秀村・藤本前掲一六三〇一六五頁。
- (25) 松下前掲「西海捕鯨業における運上銀について」、末田前掲「西海捕鯨業地域における巨大鯨組の形成過程」、末田前掲「西海捕鯨業地域における益富又左衛門組の拡大過程」。
- (26) 藤本前掲「幕末西海捕鯨業の資金構成」、藤本前掲「西海捕鯨業経営と福岡藩」、藤本前掲「鯨油の流通と地方市場の形成」、秀村・藤本前掲「西海捕鯨業」一六七頁、鳥巢京一「西海捕鯨業史の研究」、鳥巢京一「西海捕鯨の史的研究」。
- (27) 末田前掲「西海捕鯨業地域における巨大鯨組の形成過程」。
- (28) 末田前掲「西海捕鯨業地域における巨大鯨組の形成過程」。
- (29) 藤本前掲「西海捕鯨業経営と福岡藩」、藤本前掲「鯨油の流通と地方市場の形成」。
- (30) 秀村・藤本他編前掲「益富家文書年代順目録」。
- (31) 末田前掲「西海捕鯨業地域における巨大鯨組の形成過程」。
- (32) 末田前掲「西海捕鯨業地域における巨大鯨組の形成過程」。
- (33) 末田前掲「西海捕鯨業地域における巨大鯨組の形成過程」。
- (34) 前掲「勇魚取絵詞」二八七〇二八八・三〇三頁。
- (35) 武野前掲「前目勝本鯨組永統鑑」一四五頁。
- (36) 武野前掲「前目勝本鯨組永統鑑」一四四頁。
- (37) 末田前掲「西海捕鯨業地域における巨大鯨組の形成過程」。

- (38) 藤本隆士「福岡藩と藩政経済」、末田前掲「西海捕鯨業地域における巨大鯨組の形成過程」。
- (39) 藤本前掲「幕末西海捕鯨業の資金構成」、藤本前掲「西海捕鯨業経営と福岡藩」、藤本前掲「鯨油の流通と地方市場の形成」、秀村・藤本前掲「西海捕鯨業」一六七頁、鳥巢前掲「西海捕鯨業史の研究」、鳥巢前掲「西海捕鯨の史的研究」。
- (40) 末田前掲「藩政捕鯨業の展開」、末田前掲「西海捕鯨業地域における巨大鯨組の形成過程」。
- (41) 松下前掲「西海捕鯨業における運上銀について」、末田前掲「西海捕鯨業地域における巨大鯨組の形成過程」、末田前掲「西海捕鯨業地域における益富又左衛門組の拡大過程」。
- (42) 武野前掲「前目勝本鯨組永統鑑」一四六頁、秀村選三「近世西海捕鯨業に関する史料(二)」、秀村選三「近世西海捕鯨業史料『前目定目写』」。
- (43) 秀村・藤本前掲「西海捕鯨業」一六四頁。
- (44) 秀村・藤本前掲「西海捕鯨業」一六六頁。
- (45) 前掲「勇魚取絵詞」二八八頁。
- (46) 末田前掲「藩政捕鯨業の展開」。
- (47) 末田前掲「西海捕鯨業地域における巨大鯨組の形成過程」。
- (48) 松下前掲「西海捕鯨業における運上銀について」、末田前掲「西海捕鯨業地域における巨大鯨組の形成過程」。
- (49) 藤本前掲「西海捕鯨業経営と福岡藩」、藤本前掲「鯨油の流通と地方市場の形成」、藤本前掲「福岡藩と藩政経済」。
- (50) 藤本前掲「幕末西海捕鯨業の資金構成」、藤本前掲「西海捕鯨業経営と福岡藩」、藤本前掲「鯨油の流通と地方市場の形成」、秀村・藤本前掲「西海捕鯨業」一六七頁、鳥巢前掲「西海捕鯨業史の研究」、鳥巢前掲「西海捕鯨の史的研究」、末田前掲「藩政捕鯨業の展開」。
- (51) 松下前掲「西海捕鯨業における運上銀について」、末田前掲「西

海捕鯨業地域における巨大鯨組の形成過程」、末田前掲「西海捕鯨業地域における益富又左衛門組の拡大過程」。

- (52) 二野瓶徳夫『漁業構造の史的展開』(御茶の水書房、一九六二年)、岩本由輝『近世漁村共同体の変遷過程―商品貨幣経済の進展と村落共同体―』(御茶の水書房、一九七七年)、伊藤康宏『地域漁業史の研究―海洋資源の利用と管理―』(農山漁村文化協会、一九九二年)、高橋美貴『近世漁業社会史の研究―近代前期漁業政策の展開と成り立ち―』(清文堂、一九九五年)、後藤雅知『近世漁業社会構造の研究』(山川出版社、二〇〇一年)、後藤雅知・吉田伸之編『水産の社会史』(山川出版社、二〇〇二年)など優れた研究を参照し、近世捕鯨業の位置づけを考える必要がある。
- (53) 藤本隆士「近世博多における初期特権商人の後退と運上銀体系の成立(一)(二)」福岡大学『商学論叢』第三卷第一号・同卷第二号(一九五八年)、藤本隆士「近世西南地域における銀錢勘定」、藤本隆士「徳川期における小額貨幣」。

引用・参考文献

- 荒本文朗(二〇〇八)「五嶋有川湾における網取り捕鯨の歴史」『立教大学日本学研究所年報』第七号
- 岩崎義則(二〇一〇)「捕鯨業者井元弥七左衛門と平戸藩―井元家文書の伝来とその分析―」九州大学『史淵』第一四七輯
- 遠藤正男(一九三六)「幕末鯨漁業に於ける経営形態」九州大学『経済学研究』第六卷第三号
- 及川将基(二〇一〇)「鯨組組織と対馬鯨場をめぐる諸関係」大阪市立大学大学院文学研究科・塚田孝編『近世身分社会の比較史』
- 小葉田淳(一九五〇)「西海捕鯨業について」京都大学『平戸学術調査報告』、後に小葉田淳『日本経済史の研究』思文閣出版、一九七八

年に所収

- 片岡千賀之(二〇一二)「明治期における長崎県の捕鯨業―網取り式からノルウェー式へ―」『長崎大学水産学部研究報告』第九三三号
- 川淵龍(一九九四)「初期平戸町捕鯨組織家の人的考察」平戸市教育委員会編『ビジョン策定調査報告書・歴史史料調査報告書』平戸市
- 古賀康士(二〇一〇)「西海捕鯨業における地域と金融―幕末期沓岐・鯨組小納屋の会計分析を中心に―」『九州大学総合研究博物館研究報告』第八号
- 古賀康士(二〇一一)「西海捕鯨業における鯨肉流通―幕末期沓岐小納屋の販売行動を中心に―」『九州大学総合研究博物館研究報告』第九号
- 古賀康士(二〇一二)「西海捕鯨業における中小鯨組の経営と組織―幕末期小値賀島大坂屋を中心に―」『九州大学総合研究博物館研究報告』第十号
- 近藤儀左エ門(一九七七)『生月史稿―カクレキシタンの島生月史―』芸文堂
- 柴田恵司(一九八〇)「西海鯨鯨記」『海事史研究』第三十四号
- 柴田恵司(一九九五)「肥前大村深澤鯨組」石井謙治編『日本海事史の諸問題 対外関係編』文献出版
- 末田智樹(一九九二)「近世西海捕鯨業益富組の一研究―天保十・十一年大村藩江島捕鯨業を中心として―」『福岡大学大学院論集』第二十四卷第二号
- 末田智樹(一九九三)「近世後期西海捕鯨業の展開―平戸藩生月島益富組の生産組織を通じて―」『福岡大学大学院論集』第二十五卷第二号
- 末田智樹(一九九四)「近世前・中期における西海捕鯨業の成立と発展―技術と資本―」『福岡大学大学院論集』第二十六卷第三号
- 末田智樹(二〇〇四)『藩際捕鯨業の展開―西海捕鯨と益富組―』御茶

の水書房

- 末田智樹(二〇〇五)「江戸時代に存在していた国際的な捕鯨業?」中部大学編『アリーナ』第二号
- 末田智樹(二〇〇八)「近世西海捕鯨業史研究の現状と五島藩捕鯨業の地域性」『立教大学日本学研究所年報』第七号
- 末田智樹(二〇〇八)「近世日本捕鯨業の歴史地理学的研究―西海捕鯨業地域の形成と益富組の藩際経営―」昭和女子大学二〇〇七年度博士論文
- 末田智樹(二〇〇九)「近世日本における捕鯨漁場の地域的集中の形成過程―西海捕鯨業地域の特殊性の分析―」岡山大学経済学会雑誌』第四十卷第四号
- 末田智樹(二〇一〇)「自著を語る 末田智樹『藩際捕鯨業の展開―西海捕鯨と益富組―』御茶の水書房、二〇〇四年四月」中部大学編『アリーナ』第八号
- 末田智樹(二〇一二)「西海捕鯨業地域における巨大鯨組の形成過程―益富又左衛門組の運上に関する史料紹介―」神奈川大学『国際常民文化研究機構年報』第三号
- 末田智樹(二〇一三)「西海捕鯨業地域における益富又左衛門組の拡大過程」神奈川大学『国際常民文化研究叢書―日本列島周辺海域における水産史に関する総合的研究―』第二卷
- 高田茂廣(一九八八)「西海捕鯨遺文」『福岡市立歴史資料館研究報告』第十二卷
- 武野要子(一九六九)「沓岐捕鯨業の一研究―益富組小納屋の分析―」『福岡大学創立三十五周年記念論文集 商学編』
- 武野要子(一九七九)「前目勝本鯨組永統鑑」福岡大学『商学論叢』第二十四卷第一号
- 田島佳也(一九九五)「小川嶋鯨鯨合戦・解題」『日本農書全集』第五十八卷、農山漁村文化協会

- 立平進(一九九五)『西海のくじら捕り―西海捕鯨の歴史と鯨絵巻―』
 長崎県労働金庫
 田畑久夫(一九八七)『西海捕鯨業の変遷―杓岐島を事例として―』『民俗と歴史』第十九号
 鳥巢京一(一九九三)『西海捕鯨業史の研究』九州大学出版会
 鳥巢京一(一九九九)『西海捕鯨の史的 연구』九州大学出版会
 鳥巢京一(一九九九)『江戸後期蝦夷地における捕鯨開拓』福岡大学『商学論叢』第四三卷第三号
 鳥巢京一(二〇〇〇)『平戸藩鯨組主益富氏について』『西日本文化』三六一号
 鳥巢京一(二〇一二)『姫島と野村望東尼と捕鯨』『西日本文化』四五九号
 中倉光慶(一九八三)『西海捕鯨と井元弥七左衛門家について―北松浦郡大島村―』『松浦党研究』第六号
 中園成生(二〇〇〇)『生月島の捕鯨史跡』『西日本文化』三六一号
 中園成生(二〇〇二)『くじら取りの系譜―概説日本捕鯨史―』長崎新聞社
 中園成生(二〇〇六)『改訂版くじら取りの系譜―概説日本捕鯨史―』長崎新聞社
 中園成生(二〇〇七)『西海漁場における網掛突取法捕鯨法の開始』『平戸市生月島町博物館』『島の館だより』第十一卷
 中園成生(二〇〇八)『大島捕鯨の概要』平戸市生月島町博物館『島の館だより』第十二卷
 中園成生・安永浩(二〇〇九)『鯨取り絵物語』弦書房
 中園成生(二〇〇九)『捕鯨の伝統』中澤克昭編『人と動物の日本史二―歴史のなかの動物たち―』吉川弘文館
 中園成生(二〇一〇)『古式捕鯨業時代における捕鯨法の変遷―捕鯨図を参考に―』『国際常民文化研究機構編』『国際シンポジウム報告書』

- 海民・海域史からみた人類文化
 中園成生(二〇一二)『西海の島々と捕鯨』『西日本文化』四五九号
 西村次彦(一九六七)『五島魚目郷土史』西村次彦遺稿編集会
 服部一馬(一九五三)『幕末期蝦夷地における捕鯨業の企図について』『横浜大学論叢』第五卷第二号
 秀村選三(一九五二)『徳川期九州に於ける捕鯨業の労働関係(一)』九州大学『経済学研究』第十八卷第一号
 秀村選三(一九五二)『徳川期九州に於ける捕鯨業の労働関係(二)』九州大学『経済学研究』第十八卷第二号
 秀村選三・藤本隆士(一九七六)『西海捕鯨業』『江戸時代図誌 西海道一』第二十二卷、筑摩書房
 秀村選三(一九八〇)『近世後期肥前小川島捕鯨業の一断面―草場佩川の見たる―』九州大学『経済学研究』第四十六卷第一・二合併号
 秀村選三(一九九六)『近世西海捕鯨業に関する史料(一)―肥前国生月島益富家『所々組方永代記』―』久留米大学『産業経済研究』第三十六卷第四号
 秀村選三(一九九六)『近世西海捕鯨業に関する史料(二)―肥前国生月島益富家『二番永代記』―』久留米大学『産業経済研究』第三十七卷第一号
 秀村選三(一九九六)『近世西海捕鯨業に関する史料(三)―肥前国生月島益富家『二番永代記』―』久留米大学『産業経済研究』第三十七卷第二号
 秀村選三(一九九六)『近世西海捕鯨史料』『五島黒瀬組定』―肥前国生月島益富組文書より―久留米大学『比較文化研究』第十八輯
 秀村選三(一九九七)『近世西海捕鯨業における生月島益富組の創業』久留米大学『比較文化研究』第十九輯
 秀村選三(一九九七)『近世西海捕鯨業史料』『前目定目写』―肥前国生月島益富組文書より―久留米大学『産業経済研究』第三十八卷第

一号

秀村選三(一九九七)「幕末西海捕鯨業における益富組の労働組織の一

史料」久留米大学『産業経済研究』第三十八巻第三号

秀村選三(二〇〇〇)「西海捕鯨の文書を追って―益富組文書的重要性を訴える―」『西日本文化』三六一号

秀村選三(二〇〇七)「近世西海捕鯨業における鯨組の諸断面―益富組・中尾組について―」九州文化史研究所紀要』第五十号

福本和夫(一九七八)『日本捕鯨史話―鯨組マニファクチュアの史的考察を中心に―(新装版)』法政大学出版局

藤本隆士(一九六四)「幕末西海捕鯨業の資金構成―生月島益富家の場合―」『福岡大学創立三十周年記念論文集 商学編』

藤本隆士(一九六七)「西海捕鯨業経営と福岡藩―地方市場の一考察―」宮本又次編『商品流通の史的研究』ミネルヴァ書房

藤本隆士(一九六七)「鯨油の流通と地方市場の形成」九州文化史研究所紀要』第十二号

藤本隆士(一九七二)「近世西南地域における銀錢勘定」福岡大学『商学論叢』第十七巻第一号

藤本隆士(一九七五)「近世西海捕鯨業経営と同族団(一)」福岡大学『商学論叢』第十九巻第四号

藤本隆士(一九七五)「近世西海捕鯨業経営と同族団(二)」福岡大学『商学論叢』第二十巻第一号

藤本隆士(一九七六)「益富又左衛門」『豪商百人(別冊太陽)』平凡社

藤本隆士(一九七八)「近世西海捕鯨業史の研究―平戸藩生月島益富組を中心として―」九州大学『経済学研究』第四十四巻第二・三号

藤本隆士(一九七九)「捕鯨図誌『勇魚取絵詞』考」福岡大学『商学論叢』第二十四巻第二・三号

藤本隆士(一九八二)「西海捕鯨と鯨油の流通」『日本農書全集』第三十巻月報

藤本隆士(一九八三)「福岡藩と藩政経済―博多相物問屋をめぐる―」

『福岡県史 近世研究編 福岡藩(二)』福岡県

藤本隆士編(一九八四)「有川鯨組式法定(二)」福岡大学『商学論叢』第二十八巻第四号

藤本隆士編(一九八四)「有川鯨組式法定(二)」福岡大学『商学論叢』第二十九巻第一号

藤本隆士(一九九二)「徳川期における小額貨幣―銭貨と藩札を中心に―」『社会経済史学』第五十七巻第二号

藤本隆士編(一九九四)「近世西海捕鯨業史料―山縣家文書―」福岡大学総合研究所

牧川鷹之祐(一九六八)「西海捕鯨考」『筑紫女学園短期大学紀要』第三号

牧川鷹之祐(一九六九)「鯨組方一件の研究」『筑紫女学園短期大学紀要』第四号

松下志朗(一九六九)「西海捕鯨業における運上銀について―平戸藩領生月島益富組を中心に―」福岡大学創立三十五周年記念論文集 人文編』

森弘子・宮崎克則(二〇一〇)「天保三年『勇魚取絵詞』版行の背景」九州大学総合研究博物館研究報告』第八号

森弘子・宮崎克則(二〇一一)「文化五年、大槻清準『鯨史稿』成立の政治的背景」西南学院大学『国際文化論集』第二十五巻第二号

森弘子・宮崎克則(二〇一二)「大槻清準『鯨史稿』と大槻玄沢『鯨漁叢話』の関係性」九州大学総合研究博物館研究報告』第十号

森弘子・宮崎克則(二〇一二)「西海捕鯨絵巻の特徴―紀州地方の捕鯨絵巻との比較から―」西南学院大学『国際文化論集』第二十六巻第二号

森弘子・宮崎克則(二〇一三)「大槻清準『鯨史稿』と杉田玄白『解体新書』の関係性」九州大学総合研究博物館研究報告』第十一号

森田勝昭（一九九四）『鯨と捕鯨の文化史』名古屋大学出版会

山口麻太郎（一九五九）「初期日本捕鯨の諸問題」『社会経済史学』第二十五卷第五号

山口麻太郎（一九八〇）「西海捕鯨―網捕法の創始について―」『西日本文化』第一六六号

指方邦彦（一九九二）「西海捕鯨と深沢組など鯨組の盛衰について」『大村史談』第四十号

* 参考文献としては近世西海捕鯨業史に関する研究を中心に掲げ、史資料、自治体史、図録類などは省いた。

（二〇一三年四月一九日 受理）